



Title	山口堯二先生の御退官にあたって
Author(s)	前田, 富祺
Citation	語文. 1996, 65, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68885
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



山口堯二教授近影

山口堯二先生の御退官にあたって

前 田 富 祺

平成八年三月三十一日をもって、山口堯二先生が大阪大学から御退官されることとなった。山口先生に会った人はだれしもその若々しさに驚く。もう御退官の年を迎えられるとはとても信じられない。昨年の夏、大阪大学の国語学国文学研究室では、山口先生の御希望を受けて熊野路への旅行に出かけた。猛暑の中で私などは熊野古道を歩くことを遠慮したのであるが、山口先生は学生と一緒に元気に歩き通されたのである。

山口堯二先生は、昭和二十六年四月に京都大学文学部に入学され、京都大学大学院に入学、博士課程に進まれた。その間、国語学で特に文法史への関心を深められ、研究を進められた。昭和三十三年四月には京都女子高等学校、昭三十四年四月からは奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校の教諭を勤められた。一方では、古代の文法の研究を着実に実証的に進められ、優れた論考を発表されてきたのである。昭和四十一年四月には鹿児島大学教育学部に移られ、昭和四十六年四月には愛媛大学法文学部へ転じ、昭和五十年四月からは大阪大学教養部で教えられることとなった。私はその前から御高論を拝読し、感銘を受けていたのであるが、昭和五十二年四月に私が大阪大学に来てからは公私にわたって親しく接していただいた。特に宮地裕先生の御定年後は国語学専攻の学生のために御力添えいただき、平成六年四月からは文学部教授として助けていただくことが多くなった。

このようにいろいろな場においてお助けいただいた、山口先生の人柄に感じていることはしばしばであった。山口先生は、温和で慎重でありながら、同時にしっかりとした意見を持っておられるのである。大阪大学文学部も大きな変革の時に至っており、このような時に山口先生をお送りするということは、大阪大学の国語学国文学研究室にとってまことに大きな損失

であると言わざるをえない。

山口堯二先生は、国語文法史の研究に大きな業績を残された。昭和五十五年には『古代接統法の研究』、平成二年には『日本語疑問表現通史』をまとめられ、平成三年十月には大阪大学から文学博士の学位を授与されている。山口先生の文法史の研究は、これまで研究の遅れていた構文史、表現史的視点からの文法の研究であるところに特色があり、しかも上代から現代にわたって広い視野から歴史的な変化を見通しておられることは他の研究者のだれもが追隨の出来ないところである。若々しい態度は見かけばかりでなく、研究においてもである。その後も次々と研究を進めておられ、近々『日本語接統法史論』という御著者を刊行されることであり、今後私も私どもをお導き下さるものと思う。国語学会でもその研究は高く評価されており、『国語学』の編集委員、国語学会の大会運営委員としても御活躍された。国語学会創立五十周年記念として計画された『国語学の五十年』では「文法（史的研究）」のこれまでの研究史をまとめられるとともに、今後の文法史研究についての指針を示されたのである。

大阪大学の国語学もようやく基礎を固め、多くの卒業生、研究者を出してきた。多くの学生が山口堯二先生の教えを受け影響を受けてきた。教えを受けた学生のいづれもが山口先生の真摯な姿勢に感銘を受けている。その山口先生が大阪大学を離れることは、学生、卒業生のみならず、私も同僚にとっても淋しいことである。しかし、山口先生はさいわい今後そのまま関西に止まられるとのことである。今後も私どもを御教導下さることを御願いし、今後の一層の御活躍、御健勝を祈って筆をおきたい。